# かごしま 厄除けワールド

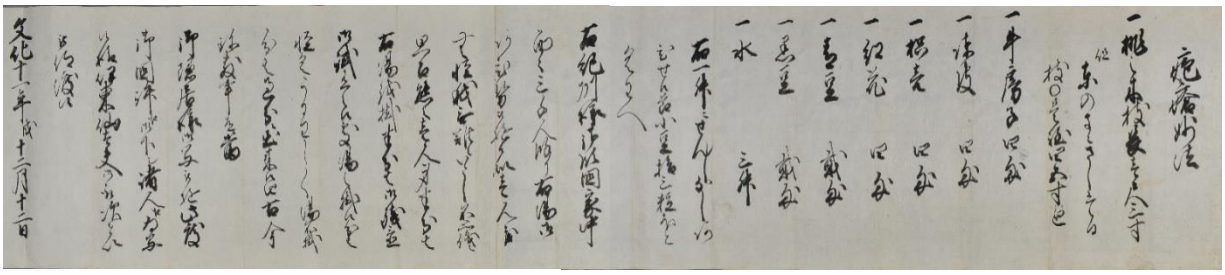
＼病魔退散！／

「御隠居様も信じた!?妙薬」の巻　Vol.4

皆さんは「疱瘡」という病を知っていますか？

疱瘡とは、「天然痘」のことです。
強い感染力をもち、罹患率・致命率ともに高く、高熱と発疹の症状が出ました。そして、治っても体中に発疹の痕が残ることがあり、とても恐れられていました。
18世紀の終わり頃、イギリス人医師エドワード=ジェンナーが発明した種痘と、その後のワクチンの普及によって、天然痘は 1980 年までに全世界で根絶されました。人類が克服した病なのです。

しかし、種痘がまだ伝わっていなかった江戸時代の日本では、疱瘡は恐るべき病。かかったら大変です。何とかして、治す方法はないか。かからない手立てはないか。人々は疱瘡に効く妙薬を探し、疱瘡除けの呪いや疱瘡神送り、疱瘡踊りなどを行なって、病から身を守ろうとしました。



黎明館蔵　玉里島津家資料

この史料は、 文化11（1814）年の「疱瘡妙法」という書き付けです。
ここには、江戸の高輪屋敷に住む薩摩の大御隠居島津重豪（8代藩主）が、紀州和歌山の疱瘡に効く妙薬を聞きつけ、それを国元にも伝えようとしたことが記されています。
この妙薬、どのようなものかというと…

桃の木の枝、長さ1尺3寸（ただし東に向いた枝…）　牛房子を4匁
陳皮を4匁　枳穀を4匁　紅花を4匁　青豆を2匁　黒豆を2匁　水を3升
これを1升になるまで煮つめ、浴びせかけるときに小豆を13粒ほど加える。
和歌山藩の家臣たち3千人余りが、この薬湯をかけて、一人も疱瘡の怪我がなく 無難に治った。
不思議に思って、試しにわざと薬湯を体の半分にだけかけ、もう半分にはかけずにいたところ、薬湯をかけた方は発疹がきれいに治り、かけなかった方に発疹の痕ができた・・・。

いかにも怪しげな薬です。現代であれば、多くの人が効果を疑うでしょう。
調べた限りでは、薩摩の領内で実際にこの薬が広められた形跡を確認できませんでしたが、当時としては開明的な大名として知られた島津重豪も、この薬を信じていた可能性はあります。
当時の人びとがこうした薬を信じたのは、病を克服したいという「藁にもすがる思い」があったからでしょう。現代でも「〇〇にはニンニクが効く」などの様々な俗説が流布していますが、それを怪しいと思いつつも、信じてしまいたくなる気持ちは、江戸時代も今も変わりないのかも知れません。
ただ、現代の私たちは、科学的な知見に基づいた情報を手にし、より正しく判断することができるはずです。

学芸員　小野